第１学年
社会科

「承久の乱と執権政治」
他者と協動で考察しながら，根拠をもとに自分の考えをもつ授業の工夫

二本松市立東和中学校　先﨑　貴徳

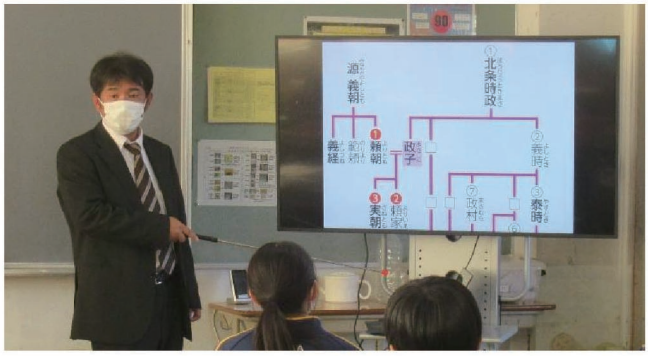
１　単元によせる授業者の思い

本学級は，歴史に関心がある生徒が多い。また，小集団活動の中で自分の考えをもち活発に意見交換ができる生徒が多い。

本単元は武士の登場から武士の台頭，院政，鎌倉幕府の成立，承久の乱をへて武士が中心となっていく政治・生活・文化の変化を学習する。

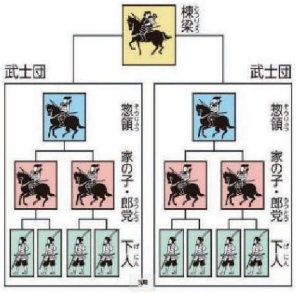
歴史の学習内容は，時の権力者を中心に進められていく。そこで，権力者ではなく家来たちの視点から見た歴史を考えさせることで，今後の歴史学習を多面的・多角的に大きな時代の変化を捉えることができるのではないかと考えた。本時では，生徒が承久の乱の前後を御家人としてどう考え行動するかについて，小集団活動を通して協動で考えさせるようにした。当時の御家人の心情に迫るために，後鳥羽上皇の討幕命令に揺れ動く御家人の様子や北条政子の演説などが収録されている再現 VTR を資料として用いた。また，承久の乱後，六波羅探題設置や御成敗式目の制定が北条氏と御家人との関係にどのように影響があったかを考える新たな課題も提示した。

振り返りの場面では，御家人の立場から承久の乱を捉え，歴史が大きく変わっていく様子を板書で振り返り，自分の言葉で自分の考えや分かったことを表現できるようにした。



２　授業の実際

視点Ⅰ　社会的事象を自分事として捉える課題の工夫



① 課題追究の視点を，承久の乱前の御家人に絞って考えさせた。

② リアリティを出すために，承久の乱前の御家人が置かれている状況や北条政子の演説が収録されている再現 VTR を段階に応じて用い，御家人を自分事として考えさせた。

③ 承久の乱後，鎌倉幕府や御家人の立場はどのように変化したかを考えさせ，内容を深めさせた。

視点Ⅱ　協動的に取り組ませる学習形態の工夫

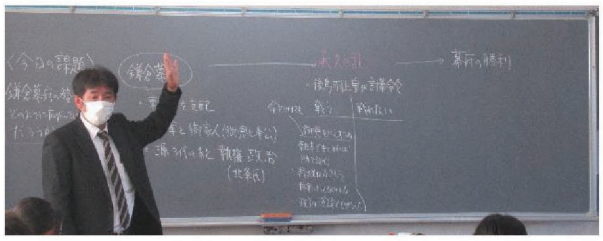
① ４人の班を作り，一つの武士団に見立てて考えさせた。

② 家来をもつ惣領の立場から，「幕府につくか」「朝廷につくか」について各班で考え，根拠をもって判断させた。

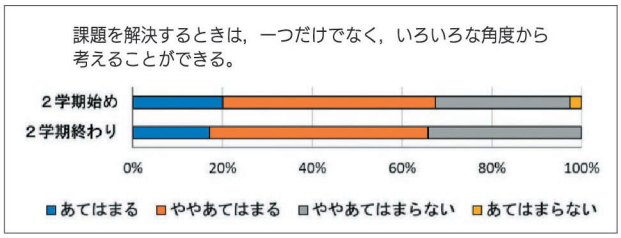
③ ホワイトボード型の協働学習ツールを使い，一人一人が意見を自由に書き，様々な考えを可視化できるようにした。

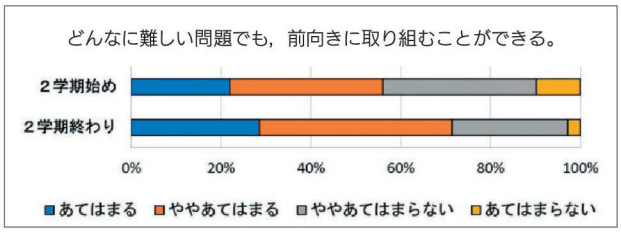
視点Ⅲ　自分の考えや思いを振り返ることができる板書の工夫

まとめと振り返りの場面で，学習内容が一目で分かり，自分の考えや思いを振り返ることができるよう，構造的な板書づくりに努めた。



3　子どもの変容





〈考察〉

「いろいろな角度から考えることができる」に対して，「あてはまらない」はなくなった。自分の考えに自信がなくて意見を出せない生徒もいることが考えられるので，班での対話の中で肯定的に自分の意見を話せるようになったと考えられる。

一人で学習課題に取り組むより，ペアもしくは小集団での対話的な学習を取り入れることによって，粘り強く課題に取り組むことができる生徒が多くなっている。

4　研究のまとめ（○成果●課題）

【視点Ⅰ】

○　北条政子の演説を含む臨場感のあるビデオ教材を使用することによって，御家人になったつもりで考えることができた。

○　承久の乱の結果を御家人の立場から考えることによって，執権北条氏との信頼関係が強まったことを理解し，課題について考えることができた。

●　御家人の選択肢として，「幕府につく」か「朝廷につく」かの２択で進めるはずだったが，朝廷と「戦う」か「戦わない」にしたため，生徒の中に混乱が生じてしまった。

●　前段をコンパクトにして，承久の乱後の鎌倉幕府と朝廷との関係を考える時間を多くとり，学び深めるべきであった。

【視点Ⅱ】

○　班の構成を４人にしたため，各班とも全員が課題について考え，多面的・多角的に考えることができた。

○　ホワイトボード型の協働学習ツールを使うことによって，出てきた考えを可視化・整理することができ，自分の考えをもてるようになった。

●　生徒の立場が「惣領」であることをもう少し強調しておけば，さらに深い話し合いがなされたと考えられる。

【視点Ⅲ】

○　板書を見ながら，まとめや振り返りをし，班での話し合いをもとに根拠を明確にし，自分の言葉で表現する生徒が多くなった。

●　協動的な学習活動を行った場合，板書をノートに書き写す時間を確保することが難しい。学習内容の定着を図るために，どのように生徒の手元に残すかを研究していく必要がある。

実際の指導案はこちらへ▶